

全ての人に穏やかな日常を

天保山中学校 三年 島尾 瑛梨奈

以前、友人と二人で桜並木の下を歩きながら、こんな会話をしたことがある。

「楽しいね、なんか穏やかで。」

「そうだね。平和だ。」

そのとき、私たちの横をぼてぼてと小さな男の子が通りすぎたので、二人でかわいい、と言いながら頬を緩ませた。

この日常も、平和あってこそそのものだ。世界には、今も戦火の中にあり、恐怖におびえながら必死に命を守ろうとしている人々もいる。実際、中東など各地で地域紛争が絶えず起こっている。

紛争とは一般的に「二つ以上の主体が、希少な資源（富や権力）を同時に獲得しようとして争う社会状況」と定義される。原因には宗教上の争い、土地や資源の奪い合い、文化や民族性の差異など様々なものが挙げられ、これらが複雑に絡み合って紛争が起こるそうだが。その現場では、子どもを含んだ多くの人々が犠牲になり、また、強制的に武装させられ戦闘に参加している子どもたちもいるらしい。子どもたちが受ける被害はそれだけではない。栄養失調や様々な感染症、教育の機会をも奪われているのだ。私たちがぬくぬくとお菓子片手にテレビを見ている間、そのような苦しみを味わっている子どもたちがいるなんて、意識したことも無かった。

紛争地帯に住む子どもたちへのインタビューの動画を見てみると、ある女の子は「道を歩いていたら、足下に爆弾が落ちてきた。」と語り、男の子は「銃声にももう何も感じない。死も怖くない。ただ、死ぬときは家族と一緒にいたいな。」と語った。衝撃だった。そんなことがあってよいのだろうかと思った。私たちが左右から車が来ないか確認して道を渡るように、彼らは自分の命を狙う狙撃兵がい

ないか、爆弾が飛んでこないか周囲を見わたし、身を小さくして道を歩く。想像するだけで怖い。辛い。そして、やはり私は「平和ボケ」していたのだと痛感した。

もしも、今自分の周りで戦争が起こったらどうなるだろうか。一秒後、一分後、生きていくかわからない。今日隣にいた大切な人が、明日にはいないかもしれない。大好きなこの街が、一瞬で焼きつくされてしまうかもしれない。もう満足にご飯を食べられないかもしれない。そう考えると、怖くてたまらない。同時に、今はすぐ近くにある「平和」がどれほど尊いものなのか改めて感じられる。普通に学校へ行けること、普通に街を歩けること、この「普通」があるだけで幸せなのではないだろうか。

この夏も八月十五日、終戦記念日があった。私はここまで海外のことを主に書いてきたが、日本でもたった数十年前に戦争があり、数えきれないほどの人が犠牲になったことも忘れてはいない。忘れてはいけない。当時まだ子どもだった祖父は、「空襲で校舎が焼けてしまったから、中庭で授業を受けたんだよ。」と何度も話をしていた。

以前、知覧特攻平和会館を訪れたことがある。飛行機や特攻服などが展示されていたが、最も印象に残ったのは隊員たちが家族に向けて書いた遺書だ。それを書いたときの本人の思いや最後の手紙を受け取った家族の思いを考えると、胸が張り裂けそうだった。

私は実際に戦争を経験したことはないが、残された資料などでより深く学び、次の世代へその記憶をつなげていくことが一つの使命だと感じている。

できることなら、世界から争いが消え、地球に暮らす人々が一人残らず幸せであればよいのに、と思う。きっと、誰だってそう考えている。自分の身の周りの温かやさやかな幸せを、たくさんの人に分け、少しでも平和の輪が広がるような行動のできる人に私はなりたい。